

「御手紙控」寛政2年5月20日条(徳山毛利家文庫「御手紙控」211)



# 22

ツナグ・ノコス ②

## 藩の断絶と文書・記録 その2

ここでは、徳山藩が失われた藩断絶前の情報を収集・管理し、後世に伝えようと努めた事例を、徳山毛利家文庫から紹介します。

### 《「逸史」の編纂》

「逸史」は59冊が現存しています。内容は、大永3年(1523)から藩断絶直前の正徳5年(1715)までです(年紀がわかるもの)。請求番号1から14までは、「元丸様御目見記」のように事象ごとの記録を、15から58までは編年で記されています(59は役人年表)。前者のグループには筆写年が記されているものがあり、それによれば文政3年(1820)を皮切りに、同4年から5年には集中的に筆写されたことがわかります。筆写者(作成者・所蔵者)は記録所です(より詳しく記録所密用方と書かれているものもあります)。

「逸史」は、藩士各家などに伝存していた記録を借用して作成されました。前者のグループは記録をそのまま筆写しました。一方後者のグループは、複数の記録を用

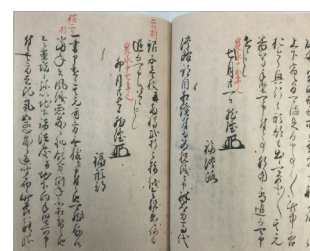
いて作成し、しかも記事の典拠(原典)が示されています。例えば「福間豊宣拔書」から引用した場合、その冒頭の右肩などに「豊」と朱書きや墨書されます。

「逸史」というタイトルから、失われた藩断絶前の歴史を明らかにしようとする意思が感じられます。

### 《「福間隆廉自記」の筆写》

原初の表題は「公用日記」などとなっていますが、藩において筆写され複数冊を合綴した際に「福間茂左衛門隆廉自記写」と名付けられました。現在19冊が残っています。

時代は天和2年(1682)から元禄4年(1691)までで、徳山藩2代藩主毛利元賢と、3代藩主元次の初期にあたります。日記の記述者は福間隆廉(1631～1723)。天和元年に藩主の表の場における世話役のトップ・御居間都合役に就き、藩主の身の回りで起きた出来事を日記に記しました。とりわけ2代藩主元賢は幼年で藩主となりながら若くして没してしまっ



「御書御判物控」

徳山毛利家文庫「御書御判物控」も、その大半は断絶前の文書類(毛利元就や輝元、徳山藩主の書状類その他)を収集したものです。全3冊。徳山藩所有の文書にとどまらず、家臣や領内寺社など、多方面へ調査の手を伸ばし、収録しています。文書の形状や所有者なども朱書きで記されます。

成立の詳細は不明ですが、「逸史」の記事も抜き出されていることから、文政頃のものではないかと考えられます。

め、彼に関する記録は非常に少なく、この日記はその欠を大いに補ってくれます。

この日記がいつ頃筆写されたのかはよくわかっていません。しかし、下の写真にあるように、原本の虫損まで記し、忠実に筆写しようとした意図が窺えます。

### 《断絶前文書類の収集》

藩は、藩断絶前に発給された文書類の情報収集にも乗り出しています。

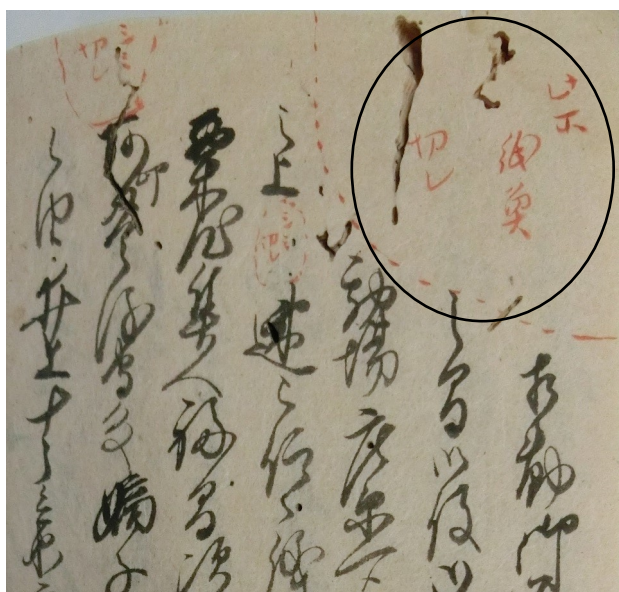
例えば寛政2年(1790)、藩士に対して「譜録」の作成・提出を命じました。「譜録」には藩士の歴代当主やその家族、藩士になって務めた役職などを記すのですが、その中には藩主や藩から与えられた文書について触れる項目があります。そこには、初代藩主就隆以来、藩主から下賜された書状などに加え、正徳以前に藩から与えられた書面(書付や奉書)が伝来していればその文面を書き写し、文面の写のみを所持している場合には、そのことを注記して文面を書き写すよう指示しています。主君から

賜った書状類の重要性から写を出させることは理解できませんが、正徳以前に藩が与えた書面までも写させていることは、藩が断絶前の文書をいかに重視していたかが窺えます。

### 《就隆・元次の詩文・歌類の収集》

これも寛政2年のことです。5月20日、藩は初代藩主就隆と3代藩主元次の詩文や歌類の編集を決定し、編集御用掛の飯田弁之助(歌担当)と本城貫治(詩文担当)に原本または写を提出するよう指示しました。2代元賢は若くして亡くなったので外されたものと考えられます(前頁上写真。また翻刻は下)。自家で拝領・伝来したものはもちろん、チャンスがあって入手したものも対象とし、出所は問わないということです。また、藩士のみならず、領内各階層にもこのことは通知されました。藩を挙げての調査・編纂事業です。

この事例は文書・記録ではありませんが、作者が藩断絶前の藩主であることを重要視していることは、前述の事例と大きな違いはありません。このように藩では、断絶前の失われた情報の再構築をはかろうとしていたのです。



此所  
紙魚  
切レ

福間茂左衛門隆廉自記写(「福間隆廉日記」13)より。文字の欠損部分については、「此所紙魚切レ」「シミ切レ」と、紙を食する「紙魚(シミ)」によって欠損していることを朱書きで注記しています。

(表頁上写真の文書翻刻・太字部分)

今度

(毛利就隆)  
発性院様・

(毛利元次)  
曹源院様之御詩文・御歌類編

集被 仰付候二付、当時散逸之

御作物探索被 仰付事二候、依之都而

御作物所持候二おいてハ

御筆又ハ草案諸巻冊中二載せ

有之分迄編集御用掛り、御歌ハ

飯田弁之助、御詩文ハ本城貫治江

(範正)  
承合、御本書又ハ書写等を以彼座

向々江差出可申候、尤

御作物他家頂戴等之分所持之義も

可有之、又古来よりハ不持伝、此節心掛

を以求得候等之分も可有之条、惣而

其出前ニハ拘らす事ニ候間、右類孰も

同様ニ相心得可申旁之趣、御家来中江

遂沙汰候、為御知如斯御座候、以上、

(以下略)